

## イネカメムシ

### ○ 被害と発生生態

イネカメムシは、山口県における斑点米カメムシ類として知られているが、近年、県内各地で被害が増加している。本種は出穂期に籾の基部を吸汁することにより、不稔籾を生じさせ減収となる。加害された穂は傾かずに直立穂となり、甚だしい場合は収穫皆無となることもある。穂揃期以降は穂の基部を加害して斑点米を生じさせ、等級格下げの原因となる。

本種は年1化性で成虫越冬する。越冬場所は松の木の下やイネ科雑草の枯葉(大内, 1954) ススキ、カモノハシの株元(小川ら, 1960)等の報告があるが、詳細は不明である。越冬成虫は、出穂期前後の水田に移動して水稻を加害する。水田に移動するまでの生態は不明である。昼間は株元に潜み、夜間に穂を加害する。

山口県では越冬成虫は6月下旬頃に発生し、7月下旬～8月に出穂した水稻(コシヒカリ、ひとめぼれ等の早生種)に集まり、7月下旬～8月下旬に産卵して増殖する。その後、新成虫は8月下旬に出穂する水稻(ヒノヒカリ、山田錦等の中晩生種)に移動するが、産卵せずに休眠に入る。8月下旬に出穂する水稻で確認される幼虫は、越冬成虫が8月下旬に産卵したもので、若令幼虫は9月中旬以降には確認されない。

### ○ 防除方法

#### (ア) 耕種的・物理的防除

- ・効果的な方法は確認されていない。本種はイネ科雑草に寄生しないため、ほ場周辺や休耕田の草刈りでは被害を防止できない。

#### (イ) 薬剤防除

- ・従来の斑点米カメムシ防除とは異なり、本種の発生が多いほ場では、水稻の出穂期(40～50%が出穂)と出穂期7日後の2回防除を行う。特に不稔籾の発生を防止するためには、出穂期の防除が特に重要である。



イネカメムシ成虫  
(体長 16.0mm 前後)



イネカメムシ幼虫



被害粒 (基部を加害)



左：被害穂、右：健全